



◆眼科診療責任者就任のご挨拶 岩淵 成祐

前任の笹元医長の退職に伴い2016年4月に昭和大学病院附属東病院より江東豊洲病院へ異動してまいりました。以前1996年から1998年まで旧豊洲病院に勤務しておりました。その頃の病院はツインタワーで、趣があり病棟と外来の移動も時間がかかっておりました。赴任した当時は当直室もレトロ感いっぱいの病室を流用した部屋で、窓からは都営住宅が見え、夏には東京湾の花火も観ることができました。それから20年経ち、豊洲地区はタワーマンションが建ち並び、IHIの造船ドックも「アーバンドック ららぽーと豊洲」になり、街の景観もすっかり変わってしまいました。病院も豊洲クリニックから江東豊洲病院へと新しく生まれ変わっておりました。



眼科の世界でもこの20年に新しい治療として光線力学的療法、硝子体注射、硝子体手術の器具や手技の進歩があり以前とはかなり環境も変わってきております。幸い前任の笹元医長がこれらの治療を行えるよう機械やシステムを整えており、良い環境となっております。

私の専門は加齢黄斑変性ですが、旗の台では白内障、緑内障、網膜硝子体の手術も行っておりました。江東豊洲病院の開院当時「子供と女性に優しい病院」がキャッチフレーズとのお話をおうかがいしましたが、眼科では「高齢者にも優しい病院」というキャッチフレーズを掲げて診療を行ないたいと考えております。よろしくお願いたします。

昭和大学江東豊洲病院地域連携講演会を6月18日（土）に開催させていただきます。



昭和大学江東豊洲病院

第25号のトピックス

- 診療責任者就任の挨拶
眼科 岩淵准教授
- マダガスカル医療協力
大塚准教授
小木曾看護師
- 新人看護職員紹介

昭和大学マダガスカル口唇口蓋裂医療協力

◆麻酔科 大塚 直樹

「昭和大学マダガスカル口唇口蓋裂医療協力」はアフリカ大陸の東、インド洋に浮かぶマダガスカル共和国第三の都市アンツィラベにあるアベマリアクリニックに約2週間滞在し、口唇口蓋裂患者を中心とした患者の手術を無償で行うプロジェクトです。作家曾野綾子さんの著作「時の止まった赤ん坊」の舞台となったのがこのアベマリアクリニックです。このプロジェクトは曾野綾子さんが昭和大学形成外科土佐准教授に持ちかけられたことから始まりました。昭和大学から形成外科医、麻酔科医、看護師が派遣され、初回は2011年5月に100個以上、1.3トンの物資を持ち込んで臨みました。以降毎年行われ今回で5回目となります。私は初回から昨年度を除く毎回参加しています。マダガスカルまでは日本から直行便はなく、どこかで必ず乗り換えが必要となります。例年はバンコク経由で約16時間の飛行時間で渡航していました。しかし、今回はフライトの関係で初めてパリ経由、飛行時間がほぼ24時間かかる経路を取らざるを得ませんでした。さらにマダガスカルに到着してもアベマリアクリニックまではおよそ4時間のバス移動が必要となります。移動だけで最低2日はかかる距離です。インフラはまだまだで停電もしばしば、幹線道路ですら大穴が開いているという始末です。また、マダガスカルは南半球にあるため季節が日本と真逆で、アンツィラベは標高およそ1500mの高地にあり酸素濃度が平地の80%程度しかないという身体にとって過酷な環境にあります。そんな中、アベマリアクリニックは曾野綾子さんらの寄進により清潔で立派な手術室が整備されています。しかし、必要な薬品や器材を自由に手に入れることはまずできず、別送荷物は無事届く保証は無いという土地ですから、プロジェクトに必要な物品は毎回我々と共に飛行機で移動しています。そのため、出発前の準備が最も重要となります。準備を怠り無く行えば、使用する物品は全て普段使っているものとなり、機器類もほとんどが日本から持ち込んだものですので、いつもと変わらない仕事を安心して安全に行うことができるのです。今回は2016年2月8日～23日まで行われました。渡航経路がこれまでと違い時間がかかったこと、自分自身初の夏のプロジェクトとなり過去の冬とは環境が大きく違ったこともあり体調を崩しこそはしませんでしたがかかり身体に負担がかかりました。それでも20件の手術を無事終えることができました。このプロジェクトも5年を過ぎ課題が続出しています。これから継続するためにも課題を一つ一つクリアしていかなければならないと強く感じた今回のプロジェクトでした。



◆看護師 小木曾 静

今年の2月8日より23日までの16日間、アフリカ大陸の東にある島国マダガスカルにおいて、口唇口蓋裂の医療支援に初めて参加させて頂きました。この医療支援は、2011年から始まり今回の活動で5年目を迎えます。プロジェクト発足時より、諸先輩方の活躍されている姿を見てきて、自分にも手術室の経験を活かして何か出来る事はないかと思い、志願しました。活動当初は、形成外科医2名・麻酔科医3名・看護師1名の合計6名とボランティアの方々に現地活動が行われていました。4年目からは昭和大学が主体となりプロジェクトを運営し、今回の派遣者は形成外科医4名・麻酔科医2名・歯科医1名・看護師3名・学生4名・事務2名の16名の規模にまでなりました。出発前より、器械のメンテナンス・衛生材料の準備をはじめ、ロストバゲージ対策として「器械だけあれば現地で手術が出来る」という体制を作り、向かいました。現地は、貧富の差が激しく裸足で生活する人々、濁った川の水で洗濯をし、路面では炎天下の中、肉や野菜が売られている環境です。もちろん、医療体制に対しても整備がされておらず、お金がなければ医療を受ける事も出来ません。そのため、奇形を持つ小児に対しても殆ど治療は行われず、そのような小児はいじめられるか、外出する事が出来ません。また、天候によっても手術が左右され、豪雨や落雷により停電が起こると、使える医療機器も限られます。医療体制だけでなく、環境も日本とは異なります。そのような中で、今回の支援では20件の手術を行い、5年間で120件の手術にまで達しました。これらの症例をトラブルなく行えたのも、プロジェクト当初からの試行錯誤があったからだと思います。術前の患者への絶飲食や入浴・歯磨きの必要性の説明など、どれも日本では当たり前出来る事ですが、出来ない・守れないという事が過去には多々ありました。しかし説明をし始め、5年間で徐々に理解してもらえるようになってきました。



『日本では当たり前受けられる治療を受けることが出来ない』『無償の手術を受けるために私達のもとへ、何時間もかけて歩いてやってくる人々』

このような現状を目の当りにして、このプロジェクトは、マダガスカルでは必要なものであることを改めて感じました。現地の人々が、今回の様な手術を受ける機会を得る事は、今後を大きく左右します。そのような場に携わることができ、貴重な経験となりました。手術を受けた小児・家族が笑顔で帰宅する姿を見て、今後もプロジェクトが継続する事で、マダガスカルの人々の笑顔が増えることを願います。



◆35名の新人看護職員が入職しました 看護部

4月1日、江東豊洲病院には新人看護職員35名（看護師33名，助産師2名）が入職しました。ちょっと緊張気味の表情で自己紹介をしていましたが、すぐに打ち解け、部署責任者が見守る中、同じ部署に配属された仲間と共に考えた1年間の目標を宣言しました。これから半年間は左肩に百合のマークのワッペンをつけて勤務します。

昭和大学附属病院の新人看護職員研修プログラムに基づき、「医療安全」「感染管理」「災害時の対応」のほか、「車椅子での移送」「採血」「点滴管理」など一つ一つの看護技術を安全に提供できるように身に付けていきます。どうぞよろしくお願いいたします。



編集後記 大野 裕亮

4月から新しく広報委員になりました。放射線治療に従事しています。これからどうぞよろしくお願い致します。当院の放射線治療では、日本で始めて導入された超音波による位置照合装置を使用しています。この装置は高精度放射線治療における画像誘導放射線治療の他に、放射線照射中でも体内の動きを監視できる新しい特徴を持っています。

新しいと言えば、この時期ちょうど新人が2名入職して始動致しました。元気があって新しい風を吹いてくれています。皆様の周りでも、何か始められる事を1つ探してみたいかがでしょうか。